



学校ビオトープ特集

生物多様性センターでは学校ビオトープを環境教育の場、そして生物多様性の保全・回復の場と位置づけ、その整備・活用を推進するため、今年度から学校ビオトープ整備のための補助事業と学校ビオトープフォーラムを始めました。学校ビオトープは自然との触れ合いが希薄な今の子どもたちにとって、地域の自然に目を向ける窓口とも言えますが、認識の違いや維持管理の労力、外来生物の扱い、活用プログラムの未整備、指導者不足など様々な課題があります。

ニュースレター第11号は学校ビオトープ特集として、11月に開催した学校ビオトープフォーラムの様子や、パネラーからの寄稿を掲載しました。

オオムラサキ復活に向けて

塚田二三雄：長柄町立水上小学校長

原体験

私自身、こどもの頃から大の虫好きでした。近くの防火用水から捕ってきたギンヤンマのヤゴを育てた時のことは今でも鮮明に覚えています。ヤゴは動くものしか食べませんので、ミミズやオタマジャクシをつかまえてきて大切に育てました。餌をあげるとどうやって食べるのか見たくくなります。水中に放り投げられたミミズが驚いて「クチャクチャ」と動き回ると、その気配を察したヤゴがミミズにそっと忍び寄り、ショベルカーのような下あごをカメレオンのように伸ばしミミズを「カキッ」と捕まえる瞬間は心ときめかせたものです。残酷なようですが、当時の私にとっては好奇心の方が強かったので、捕ってきたミミズを食べてくれるのがうれしくてうれしくてたまりませんでした。

ある日「ギョッ」とさせられることに出くわしました。可愛がっていたヤゴが水槽の中で3匹死んでいたのです。夢中で手に取ると背中が割れ、少し青い部分が見えました。かわいそうに枝を入れ忘れていたので水中から出ることができず羽化しそこなったのです。

「ああなんてことを・・・」と思い、すぐにアジサイの枝を何本か入れてやりました。すると数日して、羽化の瞬間を見ることができたのです。背中が割れ、トンボが出てくるまでじっと見続けていました。生まれたてのギンヤンマは普段見ているのとは違い、お腹もブヨブヨで羽もグチャグチャでした。しばらくするとしおれた葉っぱに水をあげたときのように、グングンと羽が伸び、お腹もすっきりと細くなっていきました。キラキラ輝くギンヤンマをそっと人差し指にとり、朝日の中で大空に放った時の気持ちは今でも忘れることができません。



ギンヤンマのヤゴの羽化

良さに気づかず

幸せなことに私が着任した学校の多くは、豊かな自然に恵まれていました。田んぼの畦にはニホンアカガエルが、谷津田ではトウキョウサンショウウオの卵塊を見ることができました。ところがそこで生活している子どもたちは、身近すぎてカエルやサンショウウオに目が向かず、都会の子どもと同じようにゲームに夢中になっているのです。ミミズを見ても、カエルを見ても悲鳴をあげている子どももいます。勿論、触ることなどできません。私は鍛えが足りない、鍛えというより、幼い頃から生き物に触れる体験が不足していたが、親が同じように生き物たちを遠ざけていたからだと思いました。「何ともったいない、身近なところに素晴らしい自然があるのに…。」多感な小学生の時期に、自然や命あるものに直接触れる体験をたくさん積ませたいと強く思いました。

オオムラサキ復活に向けて

水上小学校ではオオムラサキの飼育を総合的な学習に位置づけて取り組んでいます。地元にも住んでいると思われる国蝶のオオムラサキを復活させることは、次のような意義があると思っています。

- (1) 身近なところに豊かな自然があることに気づき、自分達の力で守ろうとする。さらに、オオムラサキの情報を地域に発信し、賛同者には「守る会」に参加してもらう。学校と地域が一体となり、地域ぐるみで守っていく活動へと発展させる。
- (2) 地域に愛着を持ち、故郷を慕い敬う心が養われる。こどもの頃にオオムラサキを育てた体験は大人になっても決して忘れることはない。感動体験の積み重ねがこどもの感性を育み、人を思いやるやさしい気持ちや正義感も培われる。
- (3) 自分達の住む長柄町の素晴らしさを実感するとともに、それを誇りに思う子どもが育つ。
- (4) 長柄町内でもオオムラサキの生息は確認されているが、水上学区では発見されていない。もし、生息



オオムラサキの成虫



オオムラサキの卵（左上）、幼虫（左下）、さなぎ（右）

が確認されれば、千葉県のおオムラサキの分布を広げる発見となる。

- (5) オオムラサキを核とした総合的な学習と各教科との関連を図ることで、子どもたちの学ぶ意欲を高め、課題解決能力や、思考力、表現力、判断力を育てることができる。

活動の内容

4年前、20数年オオムラサキを研究している地元の高校の先生から幼虫（勿論、千葉県産）を譲って頂いたのが、本格的な飼育の始まりでした。頂いた幼虫を年間を通して育てあげ、地域に放蝶することが大きなねらいですが、最終的には、オオムラサキが生息できる今まで以上に豊かな長柄町を、みんなの力で作っていかたいと思っています。

(1) オオムラサキドームの建設

「ちゅうでん教育振興助成」として100万円を頂くことができたので、校庭のピオトープの中に飼育ドームを建設しました。エノキを3本植え、クモやアリ、小鳥などの天敵を防ぐため細かいネットを張りました。このドーム中での自然交配に成功し、卵から蝶になるまで年間を通して観察することができるようになりました。

(2) 一人一鉢、一幼虫活動

幼虫は保護色なので自然の状態ではなかなか見つけることができません。観察しやすいように一人一鉢、一幼虫で育てました。幼虫にニックネームを付けたりして可愛がりました。「オオムラサキは羽が大きくてきれい。大切に育てた幼虫が羽化するとうれしい」というのが多くの子どもたちの感想です。

(3) オオムラサキの里作り

本校には、なだらかな南向きの裏山があります。手入れが不十分で竹藪になっていましたが、職員と地域の方が中心となって藪を切り払い、コナラなどの落葉樹を中心とした雑木林に変身させました。子どもたちは、



一人一鉢、一幼虫活動の様子

伐採した竹や杉の後始末に汗を流しました。そこに、エノキの苗木を20本ほど植えました。根のはびこった斜面にスコップを入れるのは大変な作業でしたが、「オオムラサキが裏山に住み着きますように」と願いをこめながら1本1本ていねいに植えていきました。

(4) エノキ博士誕生

地域に野生のオオムラサキが生息しているかを確認するために、学区内のエノキ調査に5年生が取り組みました。ヤブ蚊に刺されながらも頑張り、沢山のエノキを見つけ出すことができました。中には一人で100本以上見つけた子どももいます。みんなからエノキ博士と呼ばれるようになりました。蝶を見つけるのは難しいので、食木であるエノキを見つけ、冬になったらその根元で越冬している幼虫を探すのがねらいです。果たして見つけ出すことができるのでしょうか、調査隊は12月に出発します。

(5) 広報誌「あつまれ水上っ子」で学習の成果を保護者や地域の方に発信します。

終わりに

学習発表会をきっかけにして、「オオムラサキを守る会」を発足することができました。この会をさらに発展させたいというのが私の願いです。



学習発表会

「学校ビオトープフォーラム」の報告

吉田明彦：生物多様性センター

生態園での観察会

生物多様性の保全・回復や効果的な活用の観点から、学校ビオトープの今後の整備・活用などの方向性を探ることを目的に、県立中央博物館で昨年11月8日に学校ビオトープフォーラムを開催しました。

午前中は博物館の野外観察施設の生態園で、児童・生徒を対象にした「生き物観察『森の調査隊』」と教職員を対象にした「水辺や池、植生の復元・管理の講習」を行いました。

「生き物観察『森の調査隊』」は参加者が20種類以上あるシートを選んで、クイズ形式の課題を解いて報告するもので、例えば「森のなかからハートの形を探そう」という課題の子は、葉っぱや石など生態園にあるものの中からハートの形のものを探して報告をするという具合です。

小雨が降るあいにくの天気の中、いろいろな発見にみんな楽しそうに歓声を上げながら生態園の中を歩き回っていました。約1時間の間に3枚のシートを解く熱心な子もおり、もっとやりたい、時間が足りなかったなどの声が聞かれました。

「水辺や池、植生の復元・管理の講習」では、実際に生態園を管理している中央博物館の研究者と生態園を回りながら、説明を受けました。「森は一度整備したらあまり手を入れずに遷移を見ていくものだが、逆に水辺は積極的に手を入れていかないと荒れてしまう。」との言葉が印象的でした。実際に学校ビオトープを管理している教員からは、もっと色々なタイプのビオトープの管理について学びたいとの意見や、実際に自分の学校に来て相談に乗ってほしいとの要望もありました。



森の調査隊の様子

基調講演・ポスターセッション・

パネルディスカッション

午後は学校ピオトープの現状と今後の展望ということで、基調講演、ポスターセッション、パネルディスカッションを行いました。

基調講演は中央博物館の中村俊彦副館長から「こどもの感性を育む自然体験」というテーマで、こどもが健やかに育つうえでの学校ピオトープなどの自然体験の必要性を、事例やデータを使ってお話いただきました。

ポスターセッションでは、県からの補助金でピオトープの整備・改修及びその活用を行っている学校を中心に16の高等学校、小学校が、ポスターやジオラマなどを展示し、その前で児童・生徒などが回ってきた参加者に対し、自分の学校のピオトープの説明を行ったり質問に答えたりしました。

最初は緊張気味だった児童たちも、慣れてくるにつれて堂々と説明を行うようになり、参加者からは拍手も起こっていました。約1時間という時間があっとい



ポスターセッションの様子



パネルディスカッションの様子

う間に過ぎた感じでした。

最後は、実際にピオトープの整備に携わる教員や生徒などによるパネルディスカッションでしたが、パネリストからは「ピオトープは本物の生き物を見て触れられる場所として重要だ」との意見や、「こどもの自然体験の場としても重要だが、地域の社会教育、生涯学習の場としても期待している」、「地域と学校が、生き物を通じて感動を共有することにより結びつきが強くなる。」などの話が出されました。一方で課題としては、整備や維持管理でどこまで手を入れるかが難しい、教員の異動による後継者の問題などが挙げられました。

今回初めてこのようなフォーラムを開催しましたが、「色々参考になり来年もこのような催しをやってほしい」という声が多数聞かれました。

これを機に、各学校における取組がより一層発達していくとともに、学校間や学校とNPO、行政などの連携が進み、ピオトープの整備や活用が広がっていくことを願っています。

「生命のにぎわい調査 フォーラム」のお知らせ

千葉県自然保護課では、身近な生き物を調査する「生命(いのち)のにぎわい調査団」を昨年の夏に結成しました。団員からは珍しい生き物の発見報告が寄せられるなど、次第に盛り上がりを見せています。

そこで昨年の調査活動の締めくくりとして、県立中央博物館と共にフォーラムを開催します。

このフォーラムでは、千葉県の自然の様子や、調査団での調査方法、そして哺乳類の生態を研究している専門家から、イタチやタヌキやアライグマなどの中型肉食哺乳類の生態などを学ぶことができます。

だれでも気軽に参加できますので、皆様の参加をお待ちしています。(申し込み不要)

日時：平成21年1月31日(土)午後1時～4時

場所：県立中央博物館講堂

※「調査団写真コンテスト」を同時開催

- 内容：**(1) 千葉県の生物多様性について(講演)
(2) 調査団の目的と平成20年の報告
(3) 「動物を探そう」
(4) 意見交換会

問合せ：千葉県生物多様性センター(043-265-3601)

発行

千葉県環境生活部自然保護課 生物多様性戦略推進室 生物多様性センター(担当: 忠田)

〒260-0852 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)

編集

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615

URL: <http://www.bdcchiba.jp/index.html>